

て蓄えられた歌メモ——後に卷十八以降の三巻となる——と共に家持の薨後、官没され、平城天皇時代、家持の罪のゆるされた時、人目に触れることとなり、整理されたものの如くである。目録もこの時、加えられたものであろう。但し後の源順等の力も加わっている。

後に菅原道真の目に触れた万葉集がどういふ本であったのか知るよしもないが、新撰万葉集の序に記されたところは、まことに万葉集本来の姿にふさわしいこととなる。

したがって、歌経標式が偽書でなく、正に藤原浜成の勅を奉じて宝龜三年に著わしたものであるとしても、この書に万葉集収載歌のいくらかが取り上げられ、御製以外ほとんど論難されている現象をもって驚くに足りない。浜成もまた万葉集を読んだはずはなく、別

万葉叙事

一

短歌が散文文化されつつある。定型によってわずかに詩からの脱落を食い止めているかのようである。「私は今日ぬかみそを掻きまわしました」というような事実を、五七五七七に割当てた作品が、毎月幾百の短歌雑誌に満載されているのが現状である。短歌が言葉の

な資料により、万葉集にも収められた歌を見ているだけなのである。現に歌経標式に取り上げられた歌は万葉集所伝のものと同歌詞が相違している場合が多いではないか。

万葉集という集名は、橘諸兄の発案したものと思われ、「万葉集の名義と成立」という拙稿（「美夫君志」昭和四十一年十二月・第十号）を参照していただきたいものである。

付記 いろいろ、くふうしてみたが、第百回記念発表会で一時間にわたり述べさせていただいたものを、二十枚程度の文章になおすことなど不可能なので、やむをえず今春ある印刷物に載せた拙稿の一部に、かなり重要な点をもり込んで責をふさごうとする。おゆるし願いたい。

市村宏

芸術であることが忘れられ、文字の、イヤ活字の芸術だとまで思い違いされると、調べを忘れた短歌散文文化の傾向は一層拍車をかけられた。

上代には漢字が輸入されるまで文字がなかったから、言葉の芸術としての純粋性が保たれ、伝説も歴史もすべて詩になった。そこに文字以前の長い叙事詩の時代があったし、古事記はその面影を今に

伝え得ている。叙事詩の時代に幕を引いたのは、文字の十分なる普及であった。

だが、万葉集には長歌がある。長歌とは実は後人の命名で、これが「歌」なのであった。三十一音の歌は、これと区別するために「短歌」と呼ばれていたのである。

万葉集に「歌」と呼ばれた長歌詩形は、前代叙事詩時代の名残を示すものであった。人麿その他の長歌作品に叙事性をみることで、できる所以は、まさにここにあると思う。聴き手を前において話すべきかせる対話性が叙事詩の一性格であるが、大陸文学の影響、思索的傾向の深まりなどを原因として、独語的な作品が漸く多くなり、対話性が薄れてゆくとともに、叙事詩的な長歌が衰えていった。しかし、長歌は亡くすには惜しい詩形である。連作でなくては歌い得ないような大きな素材を扱い、これを表現する場合、長歌は用いるべき詩型であろう。

事 叙 葉 万

二

伝統の歌謡をその作品中に生かし得た作者としては、集中柿本人麿の右に出るものはない。体験に根ざすもの、伝承に素材を求めたもの、長歌作品にみられる彼の叙事にはこの二種類がみられる。四五番歌「輕皇子宿于安騎野二時柿本朝臣人麿作歌」は、長歌一、短歌四によって構成されるが、長歌では輕皇子の安騎野遊獵を叙して極めて客観的に描写され、作者もその一行中に行中ではあるが、彼自身の感情は強く抑制されて、「やすみししわが大君、高照らす日のみ子」なる輕皇子が京を出て、泊瀬山を越え、安騎野に父君日並皇子の在りし代を偲び給うことを叙して終る。長歌に関する限り

においては、まさに叙事詩というべきであろう。反歌として添えられた短歌四首の中、

46 阿騎乃野爾。宿旅人、打靡。寝毛宿良目八方。古部念爾。

47 真草茹。荒野者雖有。葉。過去君之。形見跡曾來師。

48 東。野交。立所見而。反見然者。月西渡。

49 日雙斯。皇子命乃。馬副而。御獵立師斯。時者來向。

の四首も、四八番歌の一首を除いては甚だ叙事的である。このうち四八番歌のみは、自然描写ではあっても人麿自身の觀照を表に出しての歌いぶりである。四首の排列に、漢詩における起承転結の手法を学んだかと思われる節もある。要するに、この全篇を以て叙事詩とみるに支障はなからう。

さらに一九九番歌は、「高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首拵短歌」、長歌一短歌二首から成り、長歌は一四九句を連ねた集中第一の長篇叙事詩である。うち前半をなす一三六句は、皇子一代の事蹟を極めて客観的に描写し、まず先帝天武天皇の事蹟から筆を起して、その皇子たる高市の壬申の乱における偉大な功績を詳述し、その薨去に及ぶまでを、完了表現によって叙してある。作者においてこれを目前にみた事実でないのはいうまでもなく、叙事詩的描写の妙を極めるのであるが、末尾に近い十三句と、反歌においてのみ作者の感情が披瀝されて終る。

一六七番歌日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首拵短歌においても天地の初から説き起し、天照大御神および天孫降臨の事蹟、天武天皇のことにも及び、その皇子日並皇子が天下の望を集めながら薨去された次第を叙して、宮人たちの悲嘆を述べている。神話を長々と叙したために竜頭蛇尾となり、人麿作品としては拙作という

べきであろうが、長歌の叙事性を述べるための一例としては、反って適当かも知れない。今、柿本家は歌物語を伝誦したと考えられているが、それが事実とすれば、彼の作品中に好んで持ち込まれることもありえよう。

三

人麿につぐ叙事の名手は高橋虫麿である。伝説歌人の第一人者といわれる彼の伝説を叙する歌が叙事詩となるのは当然で、集中幾多の佳作を遺している。彼にはあらゆる現象を第三者として観察、これを描写しうる才能があった。末珠名、河内の大橋を独りゆく娘子（一七四二）などのように、現存の人物を歌い、また伝承物語の主浦島子、真間手児奈、菟原娘子をも歌う。過去の人物については、自分が伝説の故地を訪れて回想する形をとって、事件のみを直叙したものではない。浦島子の歌（一七四〇）に「春の日の霞める時に、住吉の岸に出でて、釣船のとをらふ見れば、古の事ぞ思ほゆる」というごときが彼の得意の筆法で、こうすることによって過去の事実を現実と結ぶ力を持っている。能楽のワキ僧のように、みぬ世や過去のなかへ歩み入り、古人と遇う趣きがある。「水の江の浦島の子の家どころみゆ」と結んで発端と相呼応せしめ、再び現実に戻るところも能がかつていっている。しかし、この歌の中心部分には浦島伝説そのものであって、伝えられる事実の叙述にあるのはいうまでもない。一八〇七番歌に手児奈の容姿を叙して「麻衣に青衿つけ、ひたさ苧を裳には織り著て、髪だにも搔きは梳らず、履をだに穿かず行けども」と、詳細な形容を惜しまぬごとき、叙事の巧みさにおいては、まさに当代の第一人者である。手児奈については赤人にも作

品があり、世評は赤人の作を上におくが、果して然るか。反歌「葛飾の真間の井みれば立ちならし水汲ましけむ手児奈し思ほゆ」も同じ追憶方式で、事件の叙述に作者の感懐を添える作者の常套的手法である。なお「筑波嶺嬢歌」（一七五九）には簡潔の叙事に驚く。

一八〇九番歌菟原娘子の歌もまた、展墓の作の体裁になつて、「葦の屋の菟原娘子が八歳児の片生の時」から説き起し、並びなき麗質に命をかけて争う血沼壮士菟原壮士の恋争となり、娘子はいづれをとることもできず、一人自ら水死を択んだが、残された男二人は、なおも先を争って後追心中を遂げた長物語を縷々と叙し、墓辺に涙を垂れる作者も顔を出すこと、反歌（一八一〇）においても同様である。同じ題材による大伴家持、田辺福麿の歌もあるが、叙事においては虫麿作が出色である。過去の物語の再現でなく、現実の人物を素材としたかみえる作には、末珠名の歌（一七三八、詠上総末珠名娘子一首抒短歌）がある。

1738 水長鳥。安房爾繼有。梓弓、末乃珠名者。胸別之。広吾妹。腰細之。須軽娘子之。其姿之。端正爾。如花。咲而立者。玉梓乃。道行人者。己行。道者不去而。不召爾。門至奴。指並。隣之君者。預。己妻離而。不乞爾。鑑左倍奉。人皆乃。如是迷有者。容艶。縁而曾妹者。多波礼。有家庭留。

反歌

1739 金門爾之。人乃来立者。夜中母。身者田菜不知。出曾相来。

殉情可憐な女性ばかり登場する伝説歌の中に混って、珠名の出現はまことに興味が深い。夜の夜中でも男が来さえすれば出て逢うというフリーセックスの女性が、個性描写に手の届くまでに活写されているからである。現代ならば珍らしくもない、それだけに集中に

あつての異彩であり、虫麿なればこそその作品である。

人麿、虫麿以外の作品にも、叙事詩またはこれに準ずべき作品は乏しとしない。作者不明ながら、三七九一番歌の竹取翁の歌のごとき大作もある。ここには長文の題詞があり、その題詞も作品の一部をなしている。長歌には緑子が少年となり、思春期、青年期を経て老境に至るまでの男の生涯が歌われ、反歌二首「死なばこそ相見ずあらめ生きてあらば白髪子らに生ひざらめやも」「白髪し子らも生ひなばかくのごと若けむ子らに罵らえかねめや」について、翁が山中に遇った娘子九人の和うる歌各一首を掲げ、作者が抱く敬老思想鼓吹の意図も覗える。王朝物語文学の先駆的作品であることもここにいうまでもなく、集中第二の長篇である。

その他、山上憶良の貧窮問答歌（八九二）は貧者と極貧者が、生活苦について問答する形をとり、当時の実社会を写實的に描いており、しかとあらめ鬚かきなでる貧者は、作者自身の漫画化であろうが、この作も叙事詩というを妨げない。

さらに、もう一人忘れてならぬのは石上乙麿である。彼は藤原宇合の未亡人久米若売と法定期間の満たぬ前に結婚したため奸と断ぜ

に ほ ふ

——大伴家持における——

「にほふ」は、感覚そのものを超える美の一つの形態であり、日

られ天平十一年土佐に流されるが、この事件を長歌三、反歌一（一〇一九〜一〇二三）の作品に描いている。長歌の初の二つは「石の上振の尊は、手弱女の惑ひによりて、馬じもの縄とり付け、鹿猪じもの弓矢囲みて」云々、また「大君の命恐み、さし竝ぶ国に出でますや。はしきやしわが背の君を」云々と、自己を客観視して詠んでいるので、妻の作とする説まであるが、さにあらず、自分を冷たく見据えての表現である。彼は懐風藻の詩人で、嘗て遣唐使に推されこの事件についての作を含む銜悲藻という詩集もあった人、これ位の技巧は驚くに足らぬのである。

四

長歌が衰微したことはまことに惜しい。長歌ならば盛りうる叙事詩性が、和歌から失われてしまったことも残念である。もともと和歌の中にあつたもの故、すぐれた作品さえ出れば、復興は必ずしも不可能ではあるまい。歌人が長歌を捨て、俳人が連句を捨て去つたことは、ともに悔むべく惜しむべきであろう。（四三・九・一八）

伊 原 昭

本的な美の一性格として、今日なお生き続けており、それが平安時